

# 2024年 憲法を守る山口集会



2024/05/03 1

## 『平和国家』でなくなる日本!?

～流されないで、戦争をしないさせない努力をしよう～

(写真は、5月3日 山口市の集会)



山口県本部版

NO 308

治安維持法犠牲者

国家賠償要求同盟

山口県本部

〒754-0004

山口市小郡金堀町

21番の1

林洋武方

電話&FAX

083 (972) 3987

## 治安維持法と現代

2024  
春季号  
No.47



要約目次  
● 自民党の教育政策の功罪  
—— 国主権と自由主義がもたらしたもの  
—— 緊急事態改定論の問題点  
—— 「100年」の歴史から読み解く  
小沢 隆一

● 治安維持法犠牲者に国家賠償法の制定を求める請願の23年経過後の現状のみならず  
● 自民党派閥の資金事件について  
—— 組織的犯罪とはどういう意味か  
● 「維新の会」をどう見るか  
—— その興衰、本質、そして未来  
山本 豊彦  
小松 公生  
治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟 編

## 『治安維持法と現代』

2024年春季号の表紙

定価1000円

購読申し込みは同盟の各支部へ

- ◆ 四月二十八日投開票の衆院補選で自民、維新の会が惨敗、市民と野党の共闘の力が示されました。四月二十一日の美祢市議選では共産党の三好むつ子候補が五選され、五月二十六日の周南市議選で共産党の三議席確保に追い風となつていきます。
- ◆ 治安維持法による弾圧犠牲者、田中サガヨの没後八十九周年記念集会が五月十二日、下関市豊田町で開かれます。今年には田中サガヨ、兄の堯平の親族十名を含め四十名規模の見込みです。
- ◆ 五月十五日の国賠同盟の国会請願に山口県から元下関市議の江原満寿男氏が参加します。山口県の署名は三百六十二筆でした。
- ◆ 第六十九回山口県母親大会が六月三十日、山陽小野田市文化会館で開かれます。

# 今も生きてゐる河上肇の足跡

その2

河上肇記念会全国世話人 加藤碩(ひろし)

『自叙伝』から一つの文章を紹介したいと思います。

「科学の世界においても、私は迷ふ時には徹底的に迷ひ抜いた。敢えて云えば、道が左右に岐ている場合、右の方が確からしく思へば、先ず右の道に進んで見る。そして一旦その道へ足を踏み入れたなら、途中でどんな噂を聞かうが、どんな支障にぶつからうが、私は私流に、いくら時間が掛かっても可いから、歩一步踏み締めながら、傍目をしないで其の道を進んでいく。そうしているうちに、これは到底瓦れる見込のないといふ絶壁にぶつかったなら、その時初めて、断固としてその道を見棄てる。そして、もはや外に

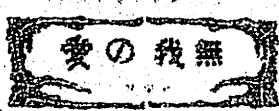
道がなければ、たとひ一人の道伴もなく如何に孤独に感じられようとも、私は敢えて左の道を進む。さうなると、私はもはや右の方の道へは豪末も未練を残しはしない。他人が何と言はうが、途中でどんな目に逢はうが、ただ一閃に新たな道を進む。私のマルクス経済学の研究は、かくして始められたのである。だから私は、自分の着眼が早かつたとは、一度も思つたことはないし、言つたこともない。寄宿舎の食堂と同じことで、早く駆け付けたものは、ぼつぼつ食堂を出かけている頃に、私はやつと座席に着いたくらいのものである。」(『自叙伝』I「九、徐々に辿つたマルクス主義への道、

五十歳前後に閲したメタモルフオーゼ」)

こういう思考方法、生き方、考え方、ここに河上の求道家としての姿があると思ひます。

彼には、一貫して宗教への強い関心がありました。それは生涯持続したと思ひます。科学的真理と宗教的真理との双方を認めて、その双方を唯物論が統一したのだと考えるところに、河上肇独特のものがあり、独自のマルクス主義だということを自らも言つておられたようです。

宗教的思考が彼の生き方に大



〈無我の愛〉脱宗教

きな影響を与えていることは確かです。私自身は、キリスト教にも、仏教にも深い造詣はありま

せんし、信心ということへの経験もまったくありませんので、河上の人生観を正確に解説することは困難だと思ひますが、キリスト教の『聖書』に有名な言葉がありますね。

「人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ。なんじを訟えて、下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。なんぢの請う者にあたへ、借らんとする者を拒むな。」つまり絶対的非利己主義といひますか、自分のためという立場、利己主義をいっさい認めない、排除する、人のためにつくしきるといふ立場ですね。それを終生変わらぬ生活信条にしていたのです。

その立場から、伊藤証信の「無我の愛」に一身を捧げる時期がありました。

彼は徹底しておりました。その宗教的信条に立つて、「無我の愛」といふ哲学的立場に一旦立ちま

すと、東京大学法学部を卒業して新進の教員として、東大農学部や学習院など五つの学校に職を得ていたのですが、その五つの職場すべてに辞表を提出して、辞めてしまうわけです。一途にそこへ突き進んでいく。

宗教については、若きマルクス、エンゲルスが相当突っ込んだ研究、模索をしております、

『ヘーゲル批判』の諸文献、『経済学・哲学手稿』、『ドイツ・イデオロギー』などの文献がすでにありましたが、当時の日本の科学的社会主義の諸理論の普及状況からしますと、まだ全部が河上の目にふれるまでには至っていないなかつたと思われます。むしろ河上肇が、『資本論』第一巻、『賃労働と資本』、『賃金、価格、利潤』などを先駆的に翻訳していった時代でした。ですから、宗教と科学的社会主義、唯物論との関係も河上独特のものである

つたと思います。

先ほど紹介しましたような河上の人生観ですから、真つ直ぐに「無我の愛」に突き進んでいった。マスコミ関係者の中には、こうした河上の行為を「売名行為だ」と揶揄したものもいたようですが、これに対して河上は「私は一生懸命だったのだ」と回顧しています。『自叙伝』には、「それまで私が、教員となつていた学校に残らず辞表をだした。一切の教職をたちながら、これからどうして糊口を支えるか、などというふことは全く私の眼中になかつた」と書いています。



河上秀夫人  
(1936年7月51歳)

『自叙伝』によりますと、夫人の秀さんはこの時代の河上を

もつとも心配していた。はたして夫が再び社会的に復帰できるのだろうか心配しておられたようです。通常の間では到底考えられないところへまで、徹底して進んでいくという一途な闘争心です。

ただこれに関連して、当時日本文壇を代表する作家であった夏目漱石が、河上肇の行動に一種の感動の念を持ったというエピソードがあります。どうも河上と漱石とは、当時直接に会って話をしたということはないが、たようなのですが、塩田庄兵衛東京都立大学名誉教授の著書『河上肇』(新日本新書)に紹介されています。

「小生の如く毎日を消光、人間は皆姑息手段で毎日を送って居る。是を思うと河上肇などという人は感心なものだ。あの位の決心がなくては豪傑とはいわれない。人はあれを精神病という

が精神病なら其病気の所が感心だ。」と友人あての手紙に書き送っています(一九〇六年二月)。

夏目漱石は、一般的、常識的には、「非人情」とか「高等遊民」とか「則天去私」とか言われて、徹底した利己主義、個人主義の思想の代表者のように言われますが、明治から大正にかけての時代閉塞の状況のもとで、厳しい現実批判の精神を持ちつづけた作家だと、私は考えています。河上肇の徹底した生き方への共感を友人への書簡に示したところに、私は漱石の鋭さを見る思いがするのです。

捨てし身の日々拾ふ

いのちかな

この一句は、河上の自作で、本人も大変気に入っていた句だそうです。彼の求道家としての日常を表した、なかなかの一句です。

(つづく)

## 私の戦争体験 北朝鮮の難民であった頃(5) 林洋武

### 第二章 日本人強制収容所へ

8月の下旬になり平壤一中の五年生で寄宿舎にいた兄の典夫が、それから一週間後に海軍に招集された一夫もそれぞれ帰ってきました。一夫は結核の療養中で徴兵は猶予になっていました。突如、敗戦直前の7月に海軍に招集され朝鮮の最南端、釜山の隣、鎮海におりました。二人の話で朝鮮全土が大混乱になっていました。すでに鉄道は一般人を乗せないで軍事用に切り替えられていました。一夫は釜山から北上して帰省しようとしたが、38度線ストップされ最後の列車に潜り込むようにして帰ってきました。米軍とソ連軍は朝鮮を38度線以北をソ連軍が南をアメリカ軍が占領することになり38度線が国境になっていました。朝鮮には民間人の日本人が70万人ほどおり北朝鮮には満州から避難してきた人たちも含めて35万人が閉じ込められてしまいました。順安にはもともと日本人200名ほどおりソ連軍が満州に侵攻されてから避難民が100名ほど加わって約300名おりました。

9月になると全員収容所に入るようになりました。持ち物は着るものは一人三枚まで布団と鍋釜など最低のものに制

限されました。順安駅前に砂金会社のクラブがあり隣接して社宅が6軒ほどありました。クラブというのは集会所で小学校の講堂ぐらゐの広さでそれまで日本人社会で国民学校の学芸会とかお祭りのような祭りに利用してきました。半分は畳(柔道ができる)残りの半分は板の間で(剣道ができる)仕様になっていました。そのクラブと6軒ほどの社宅に三百人ほど収容したのです。1畳あたり二人のわりで急遽収容されました。1畳二人というと一つの社宅に数家族が入ることになります。林家6名は3畳、クラブの舞台の一隅を当てられました。舞台は少し高くなっており敗戦までの父の地位もあって優遇されたものでした。舞台には満州から避難してきた女学校の校長先生一家がもう一隅を占めていました。あとの人は集会所の方です。回りには鉄条網が張られ夜になると武装した保安隊が巡回しました。日本人がそれまで住んでいた家を離れると在住の朝鮮人たちが一斉に家に入り残された家具などの道具を取っていききました。北朝鮮で日本人を収容したのは全体の半分ぐらゐとみられています。ただソ連軍の方針であったこととは間違いないと思います。日本人の反乱を恐れたとかその後の歴史家たちも回答していません。ただ収容されたのは子供やお年寄りを含めた民間の日本人たちです。何ら武器を持つておりませんでした。